

二〇二一年度入学試験問題

国

語

(五〇分)

第一回 二月一日実施

〔注意〕 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
問題用紙も提出しなさい。

吉祥女子中学校

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。字数指定のあるものは、句読点やかっこなどもすべて一字に数えます。なお、問題の都合上、元の文章から一部省略した部分があります。

思えば、うみかは低学年の頃からちよつと変わってた。

うみかの『科学』^{*}についてきたミニミキサーで作った、粉末が材料のバナナジュースを飲ませてもらった時のこと。学校で買う本のふろくでおやつができるなんて、と感動する私を横目に、「やっぱり、粉と水の味だね」としれつとした顔で言う。あの頃から、かわいくなかった。

うちの妹は、あんまり人にどう見られるかを気にしないんだと思う。

そして、私はそういうあの子に、よくイライラさせられる。

去年の夏、家族で海に行った。

海岸沿いのホテルに泊まって、両親と私たち、家族四人で夜の浜辺を散歩した。夕日のオレンジ色がだんだんと藍色に押され、空が夜になっていく。遮るものない視界いっぱい①の海と空を見上げていると、いつの間にか、うみかが横に来ていた。

実を言うと、私は、うみかの名前が羨ましかった。

はるかとうみか。似てる名前だけど、一つだけで見た時に、はるかは普通の名前で、うみかの方が個性的でかわいい感じがした。うみかの名前の中には「海」がある。暗い夜の海とうみかは、よく似合ってる。

普段から『科学』派で、宇宙に関する本だっ②ていっぱい読んでる妹は、私より、今もずっとたくさん③のことを考えて、感動しながら星空を眺めているかもしれない。そう考えたら、うかつに声をかけてはいけない気がした。少し迷ってから、ようやく「いいね」と話しかけた。

注 *『科学』……小学生向け学習雑誌の名称。

「きれいだね。私、絵を描く時、月を黄色く塗ってたけど、本当は白に近い金色なんだって、今、気づいた」

遠い場所に来たことで、^①ビー玉を散らしたようにきれいな夜空は、自分の家から見る空と違って『宇宙』なのだとはっきり思えた。波の音がしていた。

「空っていうと普通、昼間の水色の空を想像するけど、それって実は薄い膜みたいなもので、こっちの夜の色が地球を包んでる本当の空なんだって思えるね。不思議。暗いけど、怖くない。暖かい感じがする」

旅の興奮と、日中海で泳ぎ疲れたことと、何より家族と一緒にいるという気のゆるみが、いつになく暗闇を身近に感じさせてくれた。

うみかが「え？」と短く声を上げ、私を見た。聞き取れなかったのかもかもしれない。我ながら恥ずかしいセリフだったから、私は言い直さずに下を向いた。

砂浜には、作り物みたいにきれいな形をした貝殻がたくさん落ちていた。ザリガニのハサミのように表面がごつごつした巻き貝を手取る。耳に当て、そして「うわあ」と声を上げた。

「海の声がするよ、うみか」

ピンク色につやつや光った貝の内側から、水の底で聞くような遠い音が流れ込んできた。^②自分がとても贅沢なことをしている気分になる。だって、貝が沈んでいた海底では、こんなにはっきりと星は見えなかったはずだ。

「この貝、どのぐらい深いとこに沈んでたのかな。なんで、海の声がするんだろう。貝が記憶して一緒に持ってくるのかな。だとしたら、テープレコーダーみたい」

うみかにも聞かせたくて、貝を手渡す。貝を耳に当てたうみかは、私と同じようにしばらく音を聞いた後で「お姉ちゃん」と呼びかけてきた。

「何？」

「貝の中から聞こえる音は、海の音じゃなくて、自分の耳の音なんだよ」

うみかにはこりともしていなかった。

「よく、貝殻から海の音が聞こえるっていうけど、それを出してるのはお姉ちゃん自身。保健室で、耳の断面図の写真見たことない？ 耳って、かたつむりの殻みたいな蝸牛かきゅうって器官があるんだ。あの中、聞いた音を鼓膜こまくから脳に伝える役割をする体液が入ってるんだけど、それ、波みたい揺ゆれて動くんだって。お姉ちゃんが聞いたのは、その、蝸牛の体液が動いて認識しんしきした音だよ。普段は小さくて聞こえないんだけど、貝殻にぶつかると耳に跳はね返って聞こえる。——だからこの音は海の音じゃないし、貝殻の記憶でもないよ」

浮かべていた笑えみが強張こわばって、表情が固まる。うみかが私を見て「その音は——」と続けようとしたところで、^③頭の奥おくで真っ白い光が弾はじた。

猛烈もうれつに腹が立った。無言でホテルの方に歩き出す。急に引き返した私を、うみかがびっくりしたように追いかけてくる。

「待ってよ。どうしたの、お姉ちゃん」

「知らない！」

実際、どう言えばいいのわからなかった。

「あ、貝殻……」

うみかから、「返すね、はい」と渡されても、受け取る気がしなかった。

うみかはいっつもそうだ。こういうところが生意気だ。私が無か言いうと必ず言い返してくるし、そのことで私が怒おこっても、自分の何が悪いのかわかってない。他の子の妹はみんな、お姉ちゃんの言うことは素直すなおに聞いてるみたいなのに。

学校で、うみかに特定の仲良しがいるふうじゃないことを、私が気にすることだって、きっと気づいてない。

鉄棒の特訓は、近所の『ちびっこ広場』で放課後にやることにした。私が一緒にやろうと言う前から、うみかは毎日ここで練習していたらしい。

毛利さんが宇宙に行くのは九月。スペースシャトルエンデバーの名前をテレビでも少し前から紹介^{しょうかい}してる。

「そんなに楽しみなの？」

「楽しみ」

別に意地悪で聞いたわけじゃなかったけど、うみかの返答は短かった。

鉄棒を両手で握^{にぎ}り、えいっと空に向けて蹴^けり上げたうみかの足が、重力に負けたようにぱたん、と下に落ちる。

「足、持ってあげようか」

私が逆上がりができたのは一年生の時だ。その時、先生やお父さんが、練習する私の足を捕^{つか}まえて回してくれた。

「重いよ」

「大丈夫だよ」

⑦ 安^{やす}請^{すう}け合いしたけど、うみかがえいっと足を蹴^けり上げたかなり迫^{はくり}力があつた。捕^{つか}まえそこねて、さらにもう一回。思いきって手を伸ばしたらうみかの靴^{くつ}の先が額^{かぶ}を掠^かめた。

「いたっ」

「あ、ごめん」

ぶつかった場所を押さえて蹲^{ひざま}った私に、うみかが近寄る。「だから言ったのに」と。

「いいよ。私、自分で回れるようになるから」

「私はいなくてもいいってこと?」

じんじん痛む額を押さえながら見たうみかの顔が、表情をなくした。おや、と思う間もなく、うみかが首を振る。

「ううん。いて欲しい」

今度は私が表情をなくす番だった。そんなふうになま直に言われたら、逆らえなかった。

「——見てれば、いいの?」

「うん。お願い」

こくりと頷いて、それから何度も何度も、空に向けて足を蹴る。

「エンデバーってどういう意味か知ってる?」

何度目かの失敗の後で、うみかが息を切らして言った。手のひらが赤茶色になって、見ているだけで鉄の匂いがかげそうだ。

私は「知らない」と首を振った。

「努力」とうみかが答えた。

空にうつすらと藍色が降りてきて、濃い色の月が見え始めてしばらくした頃、うみかがとうとう練習をやめた。妹が鉄棒を離れたのと入れ違いに、今度は私が逆上がりをする。

足を上げる時、つま先の向こうに白い月が見えた。今日、うみかは何度も何度もこうやって、私と同じように、月を蹴ってたんだなあと思った。

逆上がりを成功させて、すどとと地面に降りた私に向け、うみかが「いいなあ」と呟いた。

「思いつきり走ってきて、その弾みの力を借りるって手もあるよ」

自分が最初の頃、そうやって初めて回れたことを思い出す。こんなふうには、とお手本で回って見せた。二、三メートル離れた場所から走り、その勢いで鉄棒を掴む。月を蹴り、ぐるんと回る。

「いっ？」

うみかが真似して、同じように走る。ぎこちない走り方だったけど、そのまま鉄棒を掴んだら、これまでで一番勢いよく足が上った。あと少しできれいな円が描けそうだった。

「惜しいっ！」

思わず声が出た。うみか自身、驚いた顔をしていた。

「まだ、練習してもいい？」

「このやり方で、明日からもやってみなよ。今日はもう遅いよ」

家に帰ると、もう七時を回っていて、私たちは、おじいちゃんとお母さんに叱られた。お父さんがまだ帰ってきてなくて、よかつた。

「明日も練習、一緒に来てくれる？」

うみかとひさしぶりにお風呂に一緒に入った。鉄棒を掴みすぎたせいで感覚がおかしいのか、うみかが何度も手をグーとパーに動かしている。

「いいよ」と私は答えた。

誰かが何かできるようになる瞬間に立ち会うのが、こんなに楽しいとは思わなかった。

翌日が、『りぼん』と『なかよし』の発売日だったことを、私はすっかり忘れていた。ミーナが「うち来るでしょ？」と聞く声はつとした。毎月、発売日の放課後にミーナとコンビニに一冊ずつそれぞれ買いに行つて、どちらかの家で一緒に読むのが、いつの間にかルールみたいになっていた。

その二冊読みたさに私たちの仲間に入りたがっている子は他にもいる。でも、ミーナは「はるかは親友だから」と、私だけを誘つ

てくれる。

「行く！」

漫画まんがが読みたいのはもちろんだったけど、すぐに返事をしたのは別の理由⑤からだだった。「親友」のミーナの誘いを断ったら、ミーナは次から早苗さなえちゃんとか、誰か別の子を誘うようになってしまいかもしれない。もう、次から私を呼んでくれなくなるかもしれない。

うみかと鉄棒のことが頭を掠めたけど、練習はどうせ明日もあさってもするだろう。今日の放課後に付き合えなくなったことを伝えるため五年の教室に寄ると、うみかはすでに帰ってしまった後だった。

どうしようか迷ったけど、すぐに、まあいいか、と考え直す。

学校を出る時、「おでこ、どうしたの？」と、ミーナに聞かれた。

「朝から気になってたけど、ちょっと赤いね」

「あ、本当？ 気がつかなかった。——ね、『りほん』って、今月ふろくなんだっけ？」

妹の鉄棒練習に付き合ってたなんて話したら、ミーナはきつと私を「優しい」やさしいって言うだろう。「妹と仲がいいんだね」って言うだろう。

そう思ったら、何も話したくなかった。

ミーナは一人っ子だからわかんないかもしれない。だけど、私は嫌いやだった。いいお姉ちゃんだなんて思われるのは、なんだか違う。もう六年と五年なのに、妹の練習に付き合ってるのも、かつこ悪く思えた。

ミーナの家を後にしたのは六時過ぎだった。

家と田んぼと畑、舗装ほそうされたアスファルトの道と砂利道じやりみちがランダムに続くいつもの帰り道を自転車ですべて通っている時、こんな時間に

なつてもまだ鳴く蟬せみの声を聞いて、ああ、夏休みが来るんだなあと考えた。田んぼに、背が高くなった稲いねのまっすぐな影かげがさわさわ揺れている。蛙かえるの鳴き声が聞こえた。

『ちびっこ広場』に、もううみかはいないだろうと思ったけど、帰り道だから一応寄った。

広場を囲んだ灰色のフェンス越しに見える鉄棒の付近に人影はなくて、私はそれを確認したらほっとしたような、残念なような気持ちになった。

自転車じてんしゃを停とめて家の中に入ると、「ただいま」を言う間もなく、おじいちゃんとおばあちゃんから「どこに行った」と問いつめられた。剣幕けんまくに圧倒あつとうされて、私はうまく答えられないで、ただ二人の顔を見つめ返す。

お母さんがいなかった。

何かがおかしいことに気づいて、私は台所の方向を見つめる。この時間いつもしているご飯の匂いがしない。台所の電気が消えていた。

——うみかが怪我けがをして、右腕みぎうでを折って、病院にいたこと。

お母さんは、そっちに行つて、うみかはひよっとしたらこのまま入院するかもしれないこと。

おばあちゃんたちが説明する声を、私はほんやりと聞いた。^⑦貝殻かいがらを当てて音を聞くように、遠く聞こえる声だった。

うみかは、鉄棒から落ちたのだと言う。

仕事から帰ってきたお父さんと一緒に病院に向かう時、私はずっと俯うつむいていた。

^⑧頭の奥おくでずつと、お前のせいだ、という誰のものかわからない声こゑがしてる。

車の中、私の隣となりで、お母さんに持つてくるように言われたうみかの着替きかえが、半透明はんとうめいの袋ふくろの中から透すけていた。灰色の、私のお下がりの下着。「はるか」と書かれた名前がマジックの線で消されて、下に、あの子の名前が「うみか」と書いてある。

うみかが怪我をしたと聞かされた時から、ずっと泣けたらいいのにといいながら、出てこなかった涙が、その書き直しの名前を見たら、じわっと目の奥に滲んだ。車の外で、国道の向こうの夜景が筋を引いて流れていく。

骨折したことがある子は、うちのクラスにも何人かいた。みんなギプスをしながら学校に来てた。だけど、入院したという話はあんまり聞かない。うみかはそんなにひどい怪我なのか。

あの子は、練習に來なかつた私を怒ってるに違いない。きちんと謝ろうと思つてたのに、薬の匂いのする病室に一步入つた途端、口が利けなくなつた。

うみかはとろんとしたいつもの二重瞼をさらに重そうにして、うつすらと目を開けて、ベッドに横になつていた。力と、光のない目で私たちの方を見る。朝までのうみかとまつたく違つた。顔を見たら、走つていつて、抱きついて、謝りたい気持ちになつたけど、私は足を開いて立つたまま、妹に近づくことさえできなかつた。

「うみか、お姉ちゃんが来てくれたよ」

お母さんが励ますように言うのが苦しかった。私は約束を破つた。何も言えずに、せめて目だけはそらさないようにしていると、うみかが「うん」と頷いた。右腕が白い包帯で何重にも固定されて、ベッドの上に吊られている。手がどんなふうになつてゐるのかは、包帯に覆われてるせいでわからなかつた。

私のせいだ。

怪我をした時の詳しい状況はわからないけど、私が弾みをつけた方がいいつて教えた。うみかはその勢いのまま、鉄棒の向こうに落ちたんじゃないのか。

責められることを覚悟した。お母さんたちにも、きつと怒られる。

だけど、うみかは何も言わなかつた。ぼんやりと天井を見てる。お母さんに言われて、私はうみかのすぐそばに座つた。謝らなきゃ、と思うけど、ここまで来て、言葉は口から出てこなかつた。

両親が二人とも、入院のことで先生と話すため病室を出て行ってしまう。私は下を向いて、沈黙ちんもくの時間にただ耐たえていた。

「九月までに、手、よくなるかな」

うみかがぼつりと言った声に顔を上げる。うみかの唇くちびるが、かさかさに乾かわいて白くなっていた。「痛いなあ」と呟つぶやいて、顔を歪ゆがめる。

「エンデバーの打ち上げ、家で、見たい」

「……見ようよ、一緒に」

一緒に、を言う声が震ふるえた。

一緒に練習しよう、の約束を破った私が口にしていい言葉じゃないのかもしれない。けどどうみかがゆつくりと私を見た。その口元が、なぜか笑った。

「私ね、お姉ちゃん」

「うん」

「宇宙飛行士になりたいんだ」

どうして、この時を選んでうみかがそう言ったのかはわからなかった。だけど、大事な秘密を打ち明けるように、うみかが「ナイショだよ」と続ける。

「うん」

私は頷うなづいた。そして、唇を嚙かんだ。そうしてないとまた涙が出てきそうだった。痛いのはうみかなのに、私が泣いちゃダメなの。
に。

寝ねたままで言ううみかが怯おびえていることに、声の途中で気づいた。人の目なんて気にしない、『科学』を面白おもしろがるセンスのある、風変わりで強い、私の妹が弱気になっている。

「なれるよ」と私は答えた。水の中に放り込まれたように、鼻の奥がつんと痛んで、涙がこらえきれなくなる。

「なっつてよ」

もう一度、今度はそう言い直した。

(辻村深月『家族シアター』)

問一 ～～～線ア「しれっと」、～～～線イ「うかつに」、～～～線ウ「安請け合い」とはどのような意味ですか。もっとも適当なもの

を次の1～4からそれぞれ一つ選び、番号で答えなさい。

ア「しれっと」

イ「うかつに」

ウ「安請け合い」

- | | | |
|------------------------------|--------|--------------------------------------|
| 1 平然と | 1 不自然に | 1 無理をして引き受けること |
| 2 漠然と
<small>ぼくぜん</small> | 2 不用意に | 2 嫌々ながら引き受けること |
| 3 はればれと | 3 不意に | 3 見栄を張って引き受けること
<small>みえ</small> |
| 4 きよとんと | 4 不必要に | 4 軽々しく引き受けること |

問二 ——線①「ビー玉を散らしたようにきれいな夜空」と同じ表現技法が用いられているものを次の1～4から一つ選び、番号で

答えなさい。

- 1 夕日のオレンジ色がだんだんと藍色に押され、空が夜になっていく
- 2 うみかの名前の中には「海」がある
- 3 作り物みたいにきれいな形をした貝殻がたくさん落ちていた
- 4 貝が記憶して一緒に持つてくるのかな

問三 —— 線②「自分がとても贅沢ぜいたくなことをしている気分になる」とありますが、この時の「私」の気持ちとしてもっとも適当なものを次の1〜4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 ピンク色に光る貝の内側から遠い海の底で鳴るような音が聞こえてきて、視覚的にも聴覚的にも楽しい気分になっている。
- 2 きれいな星空を眺めながら貝が沈んでいた深い海底の音を聞くと、空と海の両方を楽しめている気分になっている。
- 3 辺りには人影もなく、まるで自分たち家族だけでこの美しい星空や海の音を独り占めじにしているような気分になっている。
- 4 普段は自分の言うことに従わないうみかが今日はおとなしく聞いてくれているので嬉うれしくなり、楽しい気分になっている。

問四 —— 線③「頭の奥おくで真っ白い光が弾はじけた」とありますが、この時の「私」の様子としてもっとも適当なものを次の1〜4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 感動を妹と共有したくて話しかけたのに、そんな姉の気持ちにはお構いなしに、「私」の誤りを淡々と指摘してきし続けるうみかの無神経さに、積もり積もった怒りが瞬間的にこみ上げてきた。
- 2 何か言うとは必ず言い返してくる妹に対して、今度こそ自分が優位に立てると思って話しかけたのに、自らの知識を得意げに披露ひろうする様子に悔くやしさが募り、瞬間的に怒りがこみ上げた。
- 3 旅の興奮から気がゆるんで、つい恥ずかしいセリフを言ってしまっただけに、妹に誤りを次々と正されて、家族の前で恥はじをかかされ、今まで蓄積ちくせきされてきた怒りがとうとう爆発ばくはつした。
- 4 生意気なうみかに対してこれまで懸命けんめいに気持ちを抑おさえてきた「私」だったが、旅先でまで姉の言葉に感情的に反論してくる妹に、ついに我慢がまんも限界に達し、怒りが瞬間的に爆発した。

問五 —— 線④「表情をなくす」とありますが、それはなぜですか。もつとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 怪我をしたにも関わらず、帰らせてくれないうみかを不思議に思ったから。
- 2 助けがなければ、うみかではできるようにはならないだろうと心配したから。
- 3 うみかが回れるようになるまで練習につきあおうと覚悟を決めたから。
- 4 うみかが「私」を必要としてくれるとは思わず、想定外の返答に驚いたから。

問六 —— 線⑤「別の理由」とありますが、どのような理由ですか。四十字以上五十文字以内で書きなさい。

問七 —— 線⑥「ほっとしたような、残念なような気持ち」とはどのような気持ちですか。もつとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 うみかが自分との約束を信じて待ち続けていなかったことを安心する一方、自分のことを頼りにして一緒に練習できるように待っていてほしかったという気持ち。
- 2 うみかが遅い時間まで一人で練習に励み、無理をしすぎていなかったことを安心すると同時に、あまり練習熱心ではない妹に対して歯がゆく思う気持ち。
- 3 二日連続で帰宅が遅くなつては両親に一層叱られてしまうため、うみかの姿がなくて安心したが、自分を待たずに帰ってしまう妹には何だかがっかりする気持ち。
- 4 妹の練習に付き合うという恥ずかしいことをしなくて済んだと安心する反面、できるだけ協力して妹ができるようになる瞬間と一緒にいたかったと思う気持ち。

問八 —— 線⑦ 「貝殻を当てて音を聞くように、遠く聞こえる声だった」とありますが、それはなぜですか。もっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 どうしてこのような事態になってしまったのかをもう一度考え直したから。
- 2 うみかとの海での思い出を振り返り、妹へのいとおしさを再確認したから。
- 3 怪我をさせてしまったことを両親に責められるのではないかと思ったから。
- 4 思いもよらないことを聞き、驚きのあまり現実を受け止めきれなかったから。

問九 —— 線⑧ 「頭の奥でずっと、お前のせいだ、という誰のものかわからない声がしてる」とありますが、「私」はどのような点で自分のせいだと思っているのですか。二十字以内で二つ書きなさい。

問十 —— 線⑨ 「出てこなかった涙が、その書き直しの名前を見たら、じわっと目の奥に滲んだ」とありますが、それはなぜですか。四十字以上五十字以内で書きなさい。

問十一 この文章におけるはるかとうみかの関係についての説明として、**あてはまらないものを次の1～5から一つ選び、番号で答えなさい。**

1 人からどう見られるかを気にする自分とちがいが、相手がどう受け取るかも気にせず自分の考えのまま行動するうみかに対して、はるかは割り切れない思いを抱えていた。

2 うみかは鉄棒の練習を見てほしいと思うくらいはるかを頼りに思い、一緒にいることに安心してはるかが、その気持ちがうまく伝わらず、時にはるかをいらだたせてしまう。

3 はるかは鉄棒の練習につきあうことでうみかとの距離が近づいたことを感じているが、友人の多いはるかにとってこういう楽しさはよくあることで、うみかほどにはこの時間を大切には感じていない。

4 うみかはエンデバーの打ち上げをずっと楽しみにしていて、鉄棒の練習もそれを励みに頑張っていた。怪我をしても夢に向かっていたと思う自分の気持ちを、はるかに知ってもらいたいと思っている。

5 はるかは怪我をしたうみかにどう接して良いか分からなかった。そんな自分に大事なことを打ち明けてくれたことで、今まで気づかなかったうみかの気持ちを感じ、力づけたいと強く思っている。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。字数指定のあるものは、句読点やかっこなどもすべて一字に数えます。

通常の科学の研究では、ばらばらでしか（あるいは部分的にしか）手に入らない事実を組み合わせ、足りない部分はさまざまに推測して、現実が生じていると思われる現象の説明や謎の解明を行っています。それに加え、現実が生じている事柄の解釈や説明だけでなく、将来どうなるかについて予測しなければなりません。予言力が求められるわけです。

A、現象（結果）を前にしてその理由（原因）を探り、その理由の説明とともに、将来にどのようなことが予言できるかを提示し、理由と予言が実際に正しいと認められなければならないのです。①その間の思考の流れをコントロールしているのが、「科学的な考え方」なのです。

実は、この「科学的な考え方」は科学の研究だけでなく、私たちの日常生活におけるさまざまな事柄にも適用できることであり、現に、みんなそれなりに科学的に考えています。実際に、私たちは意識しているかどうかは別として、何か事があるたびに、

(1)なぜそうなったのだろうと考え、

(2)筋道が立った推論（推理・推測）によって立てた論理を客観的にたどり、

(3)もつとも合理的と思われる考えを最終的な結論とする、

という思考過程を採っているのは事実ですから。人は誰でも、そのような思考法を自然のうちに身につけているのです。

B、誰もがそのような「科学的な考え方」をするなら、みんな似たような結論に到達するはずなのに、ぜんぜん違った結論になってしまうことがたびたびあります。②なぜでしょうか？ それは各個人の思考の中の、(1)から(3)の間のどこかで「科学的」ではなくなくなっていて、本来あるべき筋道から外れているからです。

C、どんな場合に筋道から外れて「科学的」でなくなるかを考え、「科学的」であるためにはいかなる思考が大事であるかを探ることにしましょう。

「科学的」思考とは、誰にでも共通する前提と事実を組み合わせて、そこで何事が起こったかを推測し、考え得る範囲を絞り込んで

いく作業のことですが、最初に言っておきたいことは、その過程に個人の感情を交えてはいけないということです。

私たちが物事を考えるときには、(1)の段階で、つい「こうあって欲しい」とか、「こうあるはず」とか、「こうあるべきだ」とかの、個人的な願いや意見や私情を交えたくなくなります。しかし、このような個人の意見や願望や私情が入り込むと、論点が発散して焦点がぼけ、何を問題にしていたかがわからなくなってしまうです。というのは、各個人の勝手な見解が幅を利かせるため、各人の主張がバラバラに提示され、まとまりがなくなってしまうためです。その結果、何が事実であり、何が個人的で勝手な意見なのかの区別がつかなくなってしまうです。特に、(2)の客観的な事実を積み上げながら筋道をたどる段階では、このような主観的な意見を交えるのは混乱を招くだけになることは明らかでしょう。

あるいは、(3)の何らかの結論が見えてきても、自分の「気に食わないから」とか、「嫌いだから」とか、「主義に合わないから」というような、個人的感情で結論を受け入れられないのも「科学的」とは言えません。その客観的な理由を明確に示さず、ただ自分のわがままを言っているに過ぎないからです。結論に反対して受け入れられない場合には、「事実には反するから」とか、「論理が飛躍しているから」とか、「筋道に混乱があるから」と理由をあげて、具体的に事実や論理や筋道について納得できない点を明示すべきです。というより、明示できねばならないのです。ここには、一切私情が入る余地はありません。

時々、個人の勝手な意見や主張を押し付けようとする行動が目立つ人にお目にかかります。いかにも熱心に自分の熱い思いを述べ立てているように見えますが、単に混乱を持ち込むだけで、真の解決を曖昧にしてしまう人がいるので要注意です。本人はひたすら自己の主張を「正しく」述べているつもりなのですが、それが身勝手な振り舞いであることに気がついていないことが多くあります。

③ X をきちんと区別することが「科学的思考」の第一歩なのです。

原発が事故を起こしたとき、テレビに出た専門家の多くは事故の詳細がまだわからないのに、「事故はたいしたことはない」と言い続けました。まさに、自らの願望を優先させて、事実を見ようとしなかったのです。そのうちに大事故であることが徐々にわかってくる、この事故は「想定外」の津波が原因だから、どうしようもなかったのだというふうに言い始めました。責任が問われては

かなわなことの気持ちから、事故の真相を客観的に調査する前に、自己本位の結論を出して原因を曖昧にしようとしたのです。このような態度は決して「科学的」とは言えないことは明らかです。現実起こった事実を正面から受け止めて、私情を交えずに証拠を積み上げて、客観的に結論を導く態度が何ら見られなかったからです。

おそらく、原発の重大事故という結果に圧倒されて慌ててしまい、順を追って思考し、どこに問題があったかを明示すべき科学者としての道を踏み外し、自己本位な主張をしてしまったのでしよう。事故が起こることをまったく考えたことがなく、日頃「科学的」思考を鍛えていなかったことを物語っています。「科学的」であるためには、私情を交えず、スジが通っていて公正であり、道理や理屈にかなって合理的でなければならず、それは日常的思考で鍛えておかねばならないのです。

先の「個人の感情を交えないこと」と関連しているのですが、これと似ていて少し違った「非科学的」な言い方があることを述べておきましょう。私たちは、よく「これは経験した者でないとわからない」とか「あなたには私の気持ちはわからない」と言われたり、あるいは「私がこの目で見ただけを信用しないの？」と詰め寄られたりしたことはありませんか？このように言われると、もはや議論したり、それ以上問いかけたりすることができなくなり、互いにもはや理解できないという気持ちにさせられますね。

このように言う人は自分の経験を絶対視しており、それはどう批判されようと絶対に正しく誰も否定できないと思いつているのです。確かに自分が経験し、実際に自分の目で見ただけから、他人には否定しようがないとの自信もあるのでしょう。そのため、それを疑う言葉を一切受け付けなくなります。人から少しでも批判されると、自分の経験を絶対正しいとして人の言い分を何ら聞き入れず、自分の言っていることを立ち止まって考え直したり、違った目で見直したりすることがなくなってしまうのです。

それどころか、最初は自分の経験に曖昧な部分があったのですが、知らず知らずのうちにそれを補うように想像して付け足してストーリーを完全にし、いっそう自信を持って主張するようになることが多くあります。そうになると、実は本人もどこまでが実際に経験したことなのか、どこからが想像の産物であるのかがわからなくなるのですが、その迷いを振り切って自分が作り上げたストー

リーにいつそう固執こしつするようになるというわけです。

たとえば、犯罪を偶然目撃ぐうぜんもくげきした人の証言は信用できないことが多いと、よく言われますね。何回か証言しているうちに、目撃してないはずなのに、そのように話すとよけい信用してくれるだろうと期待する気持ちから、Y^⑤が合うよう知らず知らずのうちに話を作り出していくからです。そして、話の矛盾むじゆんが少しでも指摘してきされると、「私がこの目で確かに見たことを信用しないの？」と居直るのです。こうなると、最初の目撃証言に含まれていた真実の部分すら疑わしくなってしまう、せっかく目撃した事実そのものも信用されなくなります。犯人探しというような「科学的」^⑥になされるべき作業には、Y^⑦個人の経験の絶対視は危険であることがわかると思います。客観性が失われ、修正することができなくなるからです。

個人の経験を「科学的」な事実として活かすためには、あたかも外から見ているかのように客観的な視点で、曖昧な部分、途切とぎれている部分を正直に認めて、どのような経験をしたかを他人と共有する態度が不可欠なのです。自分の経験が絶対に正しいと信じ込み、疑問を抱かれるのを拒否きよひする人の言うことは、かえって信用してはいけないということです。

(池内了『なぜ科学を学ぶのか』)

問一

A

C

にあてはまる言葉としてもつとも適当なものを次の1～6からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。

同じ番号は一度しか用いません。

- 1 なぜなら
- 2 そこで
- 3 たとえば
- 4 それゆえ
- 5 ところが
- 6 つまり

問二

線①「その間の思考の流れをコントロール」するとありますが、ここでの「コントロール」とはどうすることですか。

もつとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 誤った考え方をしないように抑止すること。
- 2 より深い考え方ができるようにおし進めること。
- 3 考えることをやめないように管理すること。
- 4 考えることが楽しくなるように促すこと。

問三

線②「なぜでしょうか？」とありますが、その答えとしてもつとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 「科学的」な思考の訓練の不足によって、発言の責任を追及されることをおそれるから。
- 2 物事の原因を追究する際に、個人の意見をはさむことで、客観的に判断してしまうから。
- 3 考える際に、自分の見解に基づいて判断することで、正しい結論が生み出せなくなるから。
- 4 思考の途中で、想像や願望を取り込んでしまうことで、論点が明確になってしまうから。

問四 —— 線③「自己の主張を「正しく」述べているつもり」とありますが、「正しく」にかぎつつがついている理由として、
とも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 本人が何と言おうと私情として受け入れず、何事も正しく述べようとする専門家を批判するため。
- 2 本人はどんなに客観的に述べたつもりでも、正しく伝えるのはとても難しいことを強調するため。
- 3 本人がどう感じたかが重要であるため、自己の主張に正しさは本来必要ないことを暗示するため。
- 4 本人は正しいと思っているものの、客観的に見れば実は正しくないことを皮肉を込めて表すため。

問五 に入る言葉としてもっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 客観的な事実と個人の主観的な願望
- 2 具体的な事実と客観的な理由
- 3 主観的な感情と熱意のある意見や主張
- 4 個人的な見解と集団的な結論

問六 —— 線④ 「これは経験した者でないといけない」という発言のどのような点が問題だと筆者は考えていますか。もつとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 自分に対する批判や疑問を受け入れるだけの優しさが欠けている点。
- 2 自分の経験に見間違いや思い違いがある可能性を一切排除している点。
- 3 他者との関わりを拒絶し、経験を他者と分かち合おうとしない点。
- 4 自分の経験に強い確信を持ち、他者に自分の考えを強引に押しつける点。

問七 —— 線⑤ 「Y が合う」の空らんに適当なひらがな四字を補って、慣用句を完成させなさい。

問八 —— 線⑥ 「科学的」になされるべき作業」とは、どのような作業ですか。もつとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 何が起こったかを論理的に絞り込み、結論を導きだしていく作業。
- 2 これまでの事例を参考に、類推を重ねることで決断を下す作業。
- 3 事実だけを見るのではなく、その背景まで考えるべき作業。
- 4 誤りを許さず、完全な状態を追求しなければならない作業。

問九 ———線⑦「個人の経験の絶対視は危険である」とありますが、それはなぜですか。五十字以上六十字以内で説明しなさい。

問十 ———線「どんな場合に筋道から外れて「科学的」でなくなるか」とありますが、あなたの日常生活や社会の出来事の中で科学的でない思考が表れている具体例を挙げ、どのような点において科学的でないと考えるのか九十字以上百字以内で書きなさい。ただし、本文中の例を用いてはいけません。



次の1～6の——線のカタカナは漢字で書き、漢字は読みをひらがなで書きなさい。

- 1 山のイタダキに立つ。
- 2 スイスはエイセイ中立国だ。
- 3 万国ハ克蘭会を訪れる。
- 4 国のソンボウをかけて戦う。
- 5 学校は火気ゲンキンである。
- 6 類いまれな才能をもつ。

問題は以上です

